

幕末諷刺文芸は語る

— 民衆的天皇観の一端 —

奈倉 哲三

はじめに

近代化された欧米列強からの「外圧」を受け、新たな国家体制の創出を余儀なくされていた幕末維新の大変動期において、その政治動向や世相を鋭く諷刺した、いわゆる諷刺文芸に、実に多様な種類があることについてはすでに述べた通りであり、その一つである「見立ていろはたとへ」についても、具体的事例をいくつか紹介してきた。^①

本稿では、「見立ていろはたとへ」以外の諷刺文芸の中から、「落とし噺」「狂歌」「野馬台」「浮世噺」「チョボクレ」といったジャンルを選び、その中でも特に興味を惹くと思われるものを一例づつ紹介するとともに、そこに表れた、民衆の天皇・朝廷に対する見方がどのようなものを考察することにする。

一 ペリー来航時の《落とし噺》と《狂歌》

嘉永六年六月三日（一八五三年七月八日）、ペリー艦隊の浦賀沖来航は諷刺諸文芸の一斉開花をもたらした。それらは来航直後から翌年春にかけて集中的に放たれるが、背景に異国嫌い・攘夷感情が認められるものが少なくない。

特に、嘉永六年の八月あたりを中心に放たれた狂歌・狂句の中には、ペリー来航の対応にあたった老中首座阿部正弘が伊勢守だったことで、伊勢守と伊勢の神風をかけたものが多く、「伊勢の神風」でアメリカを追い払えといった排外的な神国意識が見られる。そこに明瞭な天皇・朝廷観が表れているわけではないが、尊王思想に結び付きやすい神国意識が、穏健な対応策をとる阿部伊勢守に対する揶揄として、諷刺文芸世界にかなり溢れていた。

だがそうした一方で、この時期すでにそうした神国意識を茶化したり、さらには神国思想それ自体を諷刺したのも登場している。その一例として、まずは「落し咄し」として記録された、世相諷刺ものの小咄から紹介しよう。

《落し咄し》「神々出雲の国に」

神々出雲の国に御集り被成、此度アメリカノ御祈禱被仰付候に付、神風にて吹返ス積り之処、相談不極、右に付、天照大神宮ヲ呼に遣し、早々被參、心底相尋候処、大神宮おもわくにハ、是ハ釈迦ヲ呼に遣し相談可被宜ト被申、直に呼に遣し、釈迦被參候処、此度関東浦賀方えアメリカ船參り、右神風にて吹返ス積り処、神道ハ甚すいび、仏法ハ大にさかん之時節故、何卒仏風にて宜頼ト被申候得者、釈迦、浦賀表ハ眞平御容赦、夫ハナゼニイヤジャ、御存之通り、浦賀表には台場が沢山ゆへ、御免くく^②。

この小咄、どこが可笑しいのか、仏教に縁の少ない現代人には、ちよつと解りにくい。

話はず、出雲に集まつた神々が、朝廷からアメリカ船来航について祈禱を命じられたので、神風を吹かして追い返そうと思うのだが、何の神風がよいか相談が決まらないというところから始まる。伊勢の天照大神を呼んで意見を聞いたところ、それなら釈迦を呼んで相談した方がよいというので、すぐに釈迦を呼んだところ、やってきた。そこ

で神々は、実は浦賀に来たアメリカ船を神風で追い払おうと思つたのだが、今は神道がたいへん衰微し、仏法が大いに盛んな時節なので、どうか「仏風」で追い払ってくれと頼む。そうしたところ釈迦は、浦賀表だけではどうか勘弁してくれと断る。なぜ嫌なのかと神々が問うと、釈迦が言うに、浦賀表は「台場」が沢山だから嫌だ、と言つた、というのである。

咄の「落ち」は「台場」にある。

「台場」の表面の意はもちろん、ペリーが帰つて以来、大突貫工事で建設中の幕府砲台場^①「御台場」のことであり、すでに嘉永六年冬中には幾つかの「御台場」が江戸湾品川沖に姿を現している。^③「お台場」というと、今では新橋から「ゆりかもめ」に乗って行くところ、テレビ局の本社や「ブランド」ものを売る店などが並び、若い人たちの人気を集めているところを指すようであるが、その場所^④は、当時の「御台場」より少し先の海上にあたり、「ゆりかもめ」でそこに着く直前に、海上すぐ右に見える「小島」が、当時の第六台場と第三台場の跡なのである。

さて、「台場」に隠された今一つの意味は何か、それは「提婆」である。釈尊を殺害しようとしたと伝わる弟子、「提婆達多」のことである。《江戸湾浦賀表には「ダイバダッタ」が沢山いるじゃないか、恐くて嫌だ、勘弁してくれ》というわけである。

はたしてこの「落ち」、どれくらいの人々に通じたであろうか？

それを正確に把握することはできないが、少なくとも、現代、すぐに判って笑える人の数よりは、はるかに多くの人々に通じた「落ち」であることだけは確実である。

筆者は先に、真宗門徒の世界で、節談説教や絵解き説教、または和讃等の仏教芸能が、民衆の日常生活中に極めて濃厚な密度をもつて展開していたことをあきらかにした^④が、提婆達多は、そうした真宗門徒が接していた仏教芸能の世界に登場してただけでなく、もともと、宗派を問わない多様な仏教説話の類に登場していたのであり、その説話をもとにした語り物芸能などには、提婆達多は誰でもが知っている悪人の代名詞の様に登場していたのである。したがって、当時、極めて多数の人々が、提婆達多という名を、「釈迦の殺害を企んだ悪人」として記憶していたはずであり、この「落ち」がすぐに理解できた者は極めて多数であったと言つてよい。

では、「落ち」が多くの者に通じたであろうことが解つたところで、この小咄が伝えてくれることを把握しよう。まず、前提として、背景の事実を知る必要がある。

咄の主題は、「アメリカノ御祈禱」すなわち、ペリー来航に対する退散祈禱にある。それも「神々」が仰せつかったとある以上、朝廷による国家祈禱が主題である。

ペリー来航に伴う朝廷による国家祈禱は、実際、かなりの曲折がある。

まず、「北亞墨利加船四艘」が浦賀に入港したことを、朝廷が幕府京都所代脇坂淡路守から正式に聞いたのは、艦隊が浦賀を去り琉球に向かった三日も後の、六月一五日のことであった。^⑤が、入港を聞いた朝廷は、叡慮、すなわち孝明天皇の意志として、即日七社（近江坂本山王七社）七寺に対し、一七日間の祈禱を命じる体勢に入った。だが、七社が祈禱に入った後、六月二〇日に、やはり所司代から、すでに一二日に残らず退帆したことを聞かされた。その際、所司代は、叡慮として命じた祈禱が無意味となり、七社等に「沙汰止」を命じることになるのかも知れないが、「異国船調伏」ということであれば「御先蹤」（先例）もあるので、退帆の如何にかかわらず「神国之光輝弥相顕候様」に、祈禱はしていただきたいというのが老中どもの考えである旨伝えている。^⑥

それに対し朝廷は、幕府の考えはよく解つたとし、過日七社七寺に命じた祈禱は、とりあえず一七日間修めるようにという趣旨なので、退帆にかかわらず、「四海静謐万民安穩」を祈禱するものとして続行する。それに続いての祈禱や、山王七社以外の諸社への祈禱命令は見合わせ、この先の情勢を見て考えたと答えている。

そして実際、すでに六月一五日から「四海静謐天下泰平

宝祚長久万民娛樂」を祈禱するものとしてはじまっていた山王七社七寺の祈禱だけは一七日間実行されたものの、その後はしばらく中断されたのであった。^⑧

その後、九月一日に、一度、伊勢例幣使発遣のおりに、「四海静謐」を併せて祈禱するよう伊勢神宮に命じてはいるが、朝廷が異国船渡来について正式に諸社に祈禱を命じたのは、ペリーが引き返した実に五ヶ月も後、一月一九日のことであった。それにより、まず二三日に熱田宮以下畿外一〇社が祈禱に入り、続いて一二月三日に、伊勢神宮（内宮・外宮・伊雑宮）と、石清水以下の畿内一九社が祈禱に入ったのである。宣命文には、

庶幾以神明冥助不汚神州不損人民国体安
穩天下泰平宝祚悠久武運延長

と記されていた。^⑨

以上が、ペリー来航に伴う嘉永六年段階の国家祈禱の動きである。

この小咄の創作・流布時期は明瞭ではないが、この動きの間、伊勢と畿内一九社での祈禱がなされるより以前の時期と思われる頃の記事に混入している。だが、「落ち」で台場が沢山あると言っている以上、少なくとも台場のいくつかが海上に姿を見せ始めた時期、冬一〇月に入って以降であることも確実であろう。となれば、この小咄は、六月一五日以後一七日間の山王七社七寺による祈禱が済んで数

ヶ月の後、冬一〇月に入り、一二月の伊勢祈禱がまだおこなわれていない時期のものであると判断される。

また、原作が創作された地域は、やって来た釈迦に神々が「此度関東浦賀方え」と言っているところから、畿内およびその周辺地域であることが推定される。この地域の、世相に相当程度関心のある部分にとつては、こうした際に、朝廷が山王七社に限らず、伊勢他畿外・畿内各社にも異国船退散等の祈禱を命じるはずということも、すでに十分に知られていたことである。それがまだおこなわれていないのである。

この小咄は、このような情勢下で、仏教と神道のどちらが民に浸透していたかをよく知っていた者が創作したものである。かの水戸学者藤田東湖が、神道復興の立場から、「嗚呼、天下の広き、愚冥の民は、十に七八に居り、智巧の士は、またその一二に居れば、すなはちその仏を奉ずる者、滔滔として日に滋し、純明剛毅の人に至りては、僅かに十一を千百に存するのみ」と、仏教が完全に圧倒している状況を深く嘆いていたのが、このわずか七、八年前のことであったことを考えれば、「神々」が「神道ハ甚すいび、仏法ハ大にさかん」と現状を語り、釈迦に「仏風」を吹かすことを依頼するという、この面白可笑しい設定は、当時の民衆次元での神仏の力関係を正確に反映したものであったのである。となれば、この小咄の創作・流布は、次のよう

なことを意味していよう。

まず、ペリー来航に対する朝廷による伊勢祈禱がなかなかおこなわれない状況を、神道衰微仏法盛んという宗教状況に関連づけて見る見方があったこと―伊勢天照大神が釈迦を呼んで相談した方が良いと答えていることに、そうした見方が端的に表れている―、また、この神道衰微仏法盛んという状況把握は、民衆世界においては事実そのものであり、極めて一般的なものであったこと、したがって、朝廷による伊勢祈禱に期待する風潮が強い一方で、そんなものは効果をもたらさないという見方も、かなりの部分に広がっていたはずであること、また、そうした見方のもとでは、日本を「神国」とし、「神風」を期待することは、現状にはそぐわないことのように思えたであろうこと、ほぼこのような見方が背景にあつて創作され、「台場」に多くの人が知つている「提婆達多」を掛け、笑いを誘つた小咄だったのである。

こうした小咄が流布する状況であれば、神国思想そのものに対して正面から痛罵を放つたものが現れたとしても、さほど不思議ではなからう。同じく国家祈禱を題材としたものに、次のような狂歌がある。

《狂歌》「神風は昔の事よ」

神風はむかしの事よ千早ぶるひ神や仏に俄づいしやう^⑧

この狂歌は、先の小咄よりは早い時期につくられたもの

である。^⑩「神や仏」と「俄追従」の語により、これが、先に事実確認した内の、六月一五日に入港を聞いた朝廷が即日山王七社七寺に対して一七日間の祈禱を命じたことを指すものであることが判明する。そのずつと後の、畿外・畿内各社への祈禱命令であれば、「仏」の語も「俄」の語も合致しなくなるからである。

ここで作者は、「神風」なんぞは昔のことと一蹴してしまつたばかりか、神に掛かる枕詞「千早ぶる」に「ひ」をつけ、「古い神と仏」と掛けてしまい、その古い神仏に慌てて追従するばかりの、哀れな朝廷を完全に笑い飛ばしているのである。祈禱を命じられたのが、最も古くからの朝廷勅願所、山王七社七か寺であることもピツタリとしている。

こうした見方は決して多数派ではなからうが、畿内には、例えば一世代ほど前の文政期において、儒教的な合理主義の思考を背景としつつ、徹底した無神論を説いた山片蟠桃が、中井竹山に始まる大坂懷徳堂の中から出てきていることなどを考えただけでも、畿内町人身分の中に、一定の基盤があつたことは十分に推定できるのである。

二 文久元年の《野馬台》「神国変じて」

さて、以上挙げた小咄や狂歌といったジャンルの諷刺文芸は、記録されている以上に口頭で伝わる文芸でもあり、

識字力のない人々の間にも耳を通じて広まり、楽しまれたものと想像される。そうしたジャンルのものとは明らかに異なった諷刺文芸のスタイルに、「やばだい」というものがある。「野馬台」あるいは「野馬台詩」もしくは「也婆代」と書くことが多く、鎖文字と言ふこともある。その形状は、三言一句の中一字を、四句が共有するように組み合わせて作ったもので、三言四句の「漢詩」を読み解くものである。従つて、創り手は明らかにかなりの知識層であり、享受者も、ある程度の漢字・漢詩知識がある者に限られる。ただ、近世後期から幕末にかけての時期は、今日の漢詩が廃れた時点からは想像できないほど、農村部をも含めた広い範囲に漢詩を楽しむ文化が広がっており、武士階級に限定されるようなものではなくなつた。幕末期の「野馬台」がどの程度の階層まで広がっていたかは不明であるが、文久元年（一八六二）春の風説留に初登場する次のものは、少しずつ変形され、慶応三年（一八六七）まで多くの風説留に記録されており、いわばロングヒットの「野馬台」であつた。

そこでまず、文久元年（一八六二）春に記録されたものの全形を示しておこう。三言四句が一〇片あり、四〇句で一編となつてゐる。^②

《野馬台》「神国変じて魔国と成り」

① 神皇成 君地義 君身重 良逆集 国下実
 ③ 夷国競 天失光 天命背 忠臣無 上無道
 ② 魔穢变 臣生仁 我惜輕 賊多隱 心帰財

金臣銀 武朝窮 工農患 古邪興 云平為
 君不君 公家鈍 士皆臆 正法廢 治何日
 銀君金 民衰貧 商苦悲 新弘捨 云時為

これは、①右上から斜め左へ、②左上から斜め右へ、③中上から下へ、④右中から左横へと、次のように読む。

神国変じて魔国と成り、夷国競いて皇国穢る。君仁を失はば臣義を失ひ、天光を失はば地生を失う。君命軽くして我が命重く、天命に背きて身命惜しむ。良臣隠れて賊臣集まり、忠臣無くして逆臣多し。国に財無くして心に実無く、上に道無くして下帰するところ無し。金金たらざれば銀銀たらざらば、君君たらざれば臣臣たらざらば。武家貧くして民家窮し、公家鈍くして朝家衰う。工皆悲しみて商皆患ひ、士皆臆して農皆苦しむ。古法捨てて新法興し、正法廢れて邪法弘まる。何すれぞ云うや、何すれぞ云うや、何れの日治まるや何れの時平らぐやと。

野馬台はこれ以前にも多くあつたが、この野馬台はほとんど流行つたらしく（現時点まで、諸風説留原写本から全二二点の筆写を確認）、少しずつ変形され、慶応三年まで写

されている。確かに相当の知識者の作によるものではあるが、「工皆悲しみて商皆患う、士皆慮して農皆苦しむ」は最後まで変わらず、視点は確実に民衆にある。しかもこうした諷刺的遊戯を「何んすれぞ言うや、何んすれぞ言うや（一体何のために言うのか）」と自問し、「いずれの日治まるや、いずれの時平らくや」と自答、ひたすら安寧・平穩を願う民の立場から、敢えて戯れ言を呈しているのだと、確固たる民衆的立場を明らかにしている。

この民衆的立場・視点に立って、神国は変じてすでに魔国となつてゐる、夷国が競つて皇国は穢れてゐるではないか、と言つてゐる。「夷国競つて皇国穢る」とだけあれば、むしろ攘夷の立場から皇国の「純血」を守らんとするような、尊王攘夷の感覚とも取れるが、その前に「神国変じて魔国と成る」と言つてゐることに注意したい。皇朝学者・尊王論者がしきりに、この国を「神国」「神国」と言つてゐるけれど、もうすでに魔国となつてゐるじゃないかと言つてゐるのである。「皇国穢る」も、だから単純な尊王攘夷などではない。むしろ、いくら攘夷攘夷と言つても、貿易開始以後の現実では、そうした尊王攘夷主義者達がいうような「皇国」は、もうとつづくに穢れてゐるよと、言つてゐるのである。七片目で、「公家鈍くして朝家衰う」とあることからそれは判る。こうした感覚があきらかにあつたために、櫻木章『側面觀幕末史』では、「變」と「魔」

を伏せ字にして何だかわからなくしてしまったのである。^③同じ「配慮」で、「君仁を失はば」の「君」も「仁」も伏せ字にしてしまった。^④とすると、この君臣は一般的・抽象的な君臣の意味に留まるものではないだろう。

漢詩は、短詩形であればあるほど、一般的・抽象的な表現となることが多い。三言一句は当然抽象度が高い。だが、その場合でも、その時に生まれた背景が必ずある。具体的な事件を契機にしながら、詩として純化される。この場合も、君が仁を失ひ、臣が義を失つた（と見えた）「事件」が背景にあり、それで詩が創られたのである。また、もしも単なる一般論としての「君失仁」であれば、『側面觀幕末史』といえども伏せ字にまではしなかつたはず。『側面觀幕末史』は、猥雑な語以外では朝廷もしくは尊王に関わる語を伏せ字としてゐるのである。ということは一九〇五年時点でも、この「君」が天皇おそひと統仁すなわち孝明天皇を指し、「臣」が幕府將軍家茂を指すということが解つてしまふと思つたから伏せ字としたのである。では、その事件、文久元年（一八六一）初春ころ迄で、「君仁を失はば臣義を失」つた「事件」とは何か？

それは和宮わのみや下向の決定情報以外にない。

万延元年（一八六〇）一〇月六日、孝明天皇は關白九条尚忠ひきただの意見を容れ、妹和宮を將軍家茂の夫人として、翌春下向させることを決定、^⑤同月一八日、正式に幕府に伝え、

幕府は一月一日に公表している。^⑩ だが、下向予定であった翌文久元年三月に、東国の諸川満水と水戸藩浪人の「不法之所行」による「人心不穩」などを理由に延期が決定され、実際の下向出立は周知の如く、一〇月二〇日になった。^⑪ 下向決定から延期となるまでの時期、万延元年冬から文久元年春までの間、「和宮江戸へ」の情報はすでに京・江戸ともに公的に流れていた。例えば、万延二年の一月（文久への改元は二月一九日）、京では「宮様御移転御供用掛掌中覽要大全」が、また江戸では「和宮降嫁公武役人附」が刊行され、それが「辛酉紀聞」に筆録されている。^⑫ また、それより以前、万延元年二月二十五日に、四

条大宮に住む高木在中は、京都所司代らが結納ご祝儀で参内していることを日記に記し、さらに翌万延二年二月八日の項には、下向のご祝儀として、前日七日朝、「駕与丁」八六人に対し、金一両づつが下されたことを記しているなど、^⑬ 下向決定はすでに周知のことだったのである。

ところで、この和宮下向に対して反対論が多かった朝廷から最終的に勅許が下されたことに関しては、孝明天皇が公武合体の立場から幕府の願い出を積極的に受け止めたと観る見方が、当初は一般的であった。^⑭ 「君仁を失はば臣義を失う」とは、このことを言っていたのである。

妹御宮には可哀想だ、天皇は仁を失っている。幕府もまた臣下としての義を失っている、と言うのである。冒頭の

「神国変じて魔国と成り」は、そうした朝廷の動向も視野に入れてのことだった。

「工皆悲しみて商皆患う、士皆臆して農皆苦しむ」「何れの日治まるや何れの時平らぐや」と、民衆の視点・民衆の立場に自らを置く諷刺漢詩家は、仁を失った天皇を批判し、皇朝学者・尊王論者の「神国」「皇国」喧伝も揶揄するのであり、それがまた、文久元年から慶応三年まで、広い範囲の知識層の中で写し取られていったのである。

三 元治元年の《浮世噺》「当世子供雑談」

では次に、一般に「浮世噺」と言われるジャンルの創作噺から、禁門の変直後の「当世子供雑談」と題する作品を紹介しよう。元治元年（一八六四）八月頃に流行ったものである。

一 拾四五才を頭として拾式三才の男子、いつれも手習傍輩と見へ、お八ツ下りのわやくくと、辻講釈の聞とり学文、高慢らしき事を云とも、根か町そたちのわんはく連中、つじつまあわぬ、^⑮

と言うような出だしで始まる。以下、手習い帰りの数人の子供がそれぞれ長州や肥後などの立場・主張を代弁しつつ議論しあっているもので、全体として一定の政治的主張・提言を展開している。かなり長い構成なので、天皇・

朝廷観が窺える箇所だけを飛び飛びに拾っていく。

文中「一」は作者自身の註、脇書きは後筆または記録者による説明、*は引用者の註付け、

二 長公「おめん達も知て居る京屋乃金公今上が一件ハ、全体本をたゞせば、京屋がああいふ武ばつた出来そこねへで、世間知らずの、おささまつくらの、ふところそだちの、はぬもんだろふ、そこへ付け込で：」

三 長公「何、もとハ京屋の金公があつちへべつたりこちちへべつたりから、おこつた事さ」

四 熊公「全体を云ハ、京屋の金公か悪ハナ、いらざつよがつて、三徳に任せておけバいゑのよ、おかねへからこんな事になつたのだ」

五 閑公「そりヤア実におもへは気の毒たとみんな世間で云て居るよ、何を云にも相手がわるいからこまるよノウ、どふかして手打にしていもんだ、何分にも天ふら屋のむす子と云もんだから「作者云、天ふら屋の主とは町方にておんみつ」おかつひきでも有し、夫に、金公かおだてられてこうぎにのほつて居るけれど、むかしやの暁公や舜公の様にヤア人か伏さねへハナ、(中略)誰が山の主になろふが、金公に構手ハねへそふだから、気をもまずと、風流がつて歌でも詠たり、おきさまに玉おつひて居れハいゑのよ、いらざる武芸か好でつよかるふが、根が武家でねへもんだから、い

けるもんか」

*長公二長州(毛利敬親)、*ぶばつた二強がり者、*ふところそだち二親の側で育つて世慣れないこと・温室育ち、*はぬもん二撥ね物で傷物・B級品の意、*熊公二「肥後熊」とも記され細川昭邦、*三徳二徳川御三家から転じ徳川將軍家茂、*閑公二「鍋屋の閑公」とも記され鍋島閑叟直正、*こうぎ二公儀でここでは朝廷、高座を意味する「講義」とかけたもの。

こんな風な会話のやりとりがつづく。禁門の変直後でありながら長州に同情的で、朝廷に非常に敵しい。幕府にもまだ期待感を持っている。解決策を閑公に語らせている。

六 閑公「まづ金公を商買替をさせて湯屋仙洞にするのたよ、皆々「そこで」、閑「夫から和印を推戻して跡目に立るのサ」、皆々「フム女主かの」、閑「マアそふして置いて」、皆々「そこで」、「三徳を一旦引籠らせて七丸を跡目として」、(中略)皆々「成る程ナ」、閑「そこで三徳を京屋天子へすはらせて一対にするのサ、こつちは七丸にふまえさせれば、水風呂本林も納得して向後湯殿山へ籠る事もしめへサ、上の人達を立身させて、世界を穩にするのさ、ナント奇々妙々の良策たろふ」、皆々「フウ成程、こりやアいいが、(後略)」

*「湯屋」二銭湯で仙洞つまり院・上皇の意、*七丸二橋慶喜の幼名が七郎麿であることで慶喜。

というようないふことが提言されている。

作者の政治的主張は閑公、すなわち肥前藩主鍋島闕叟直正かねさすによって語られている。天皇統仁おきひと（孝明）を院に退かせた上で、和宮に皇位を継承させ（女帝の出現）、將軍職を退いた家茂とともに内裏に座らせ、その上で慶喜に將軍職を継がせるといった、独特の「公武合体」的政權論を展開している。まだ、徳川家に基本的な信頼感を持っている構想である。こうした政權構想の者でも、天皇を「京屋の金公」と呼び、「ぶばった出来そこねへ」「世間知らずの、おさきまつくらの、ふところそだちの、はぬもん」と、まったく無遠慮で言いたい放題。孝明天皇と朝廷を思うままに評している。さらに、「もとハ京屋の金公があつちへべつたりこちちへべつたりから、おこつた事さ」「全体を云ハ、京屋の金公か悪ハナ」とふらつく天皇統仁・朝廷を批判。しまいに、「どふかして手打にしていもんだ」とまで言い、あげくは、「おだてられてこうぎにのほつて居るけれど、むかしやの晁公や舜公の様にヤア人か伏さねハナ」と堯舜まで引き合いに出して、そのようには人が従わないと断定。そして最後は雅の世界に暮らせと言う。

かなり政情に明るい者が創作した浮世噺であり、話の創り手は江戸町育ちの幕臣ではないかと思われるが、この時点で長州にも同情的であることを考慮に入れると、あるいは江戸の町人とも思われるが、判断はつきかねる。

いずれにせよ、子供の政治談義としては当時としても

少々無理があるとは思われるが、手習いの仲間同士がその帰りがけに「辻講釈の聞きとり学文」として談義しているのであれば、それなりのリアリティーがあつたというところであり、禁門の変以後、江戸の民衆の耳目は政治の奥深いところまで及んでいたことがよくわかる。

結論の、天皇統仁おきひと（孝明）を院に退かせた上で、和宮を皇位に据えるという新たな権力の構想からだけ言えば、天皇・朝廷がそれなりに尊重されていると言えなくもない訳だが、その中においてさえ、先に見たような有り様で、天皇の神権性などはおろか、權威などまつたくない状態、まつたくの無遠慮・言いたい放題ということに特に注目しておきたい。

四 慶応三年の《チヨボクレ》「人間万事裏表」

では小稿の最後に、幕末維新期に大流行した幾つものチヨボクレの中から、慶応三年九月ころに流行つたチヨボクレ、「人間万事裏表」を紹介しよう。

これは刊本史料の『側面觀幕末史』にも『落書類聚』にも集録されている。②だが、天皇・朝廷に関わる部分の多くが『側面觀幕末史』では伏せ字とされ、また『落書類聚』では編者の矢野隆教が改竄してしまった部分さえある。そこで、原本の写しと見られるもの（ただし、写本系

統は別と考えられる)を、『新聞書』に見い出したので、それで紹介する。これも非常に長い語りなので、天皇・朝廷観が窺えるところだけに絞って紹介する。

史料中の、――は「側面觀幕末史」の伏せ字部分、――は「落書類聚」で改竄された部分、「――」は書き換えられた語。表記上のみの異同は無視し、『新聞書』の表記に従う。

語り出しは、「夫情 おもんみれハ、人間万事裏表、舞台と楽屋の有様をチョイと摘んで申べし」というように始まる。舞台を表、楽屋を裏として、表(舞台)に見える事柄の裏(楽屋)を覗き、真実を暴こうという意図である。

本題に入って一段語った後、次のような一段が出てくる。以下、飛び飛びに引用する。

天子と尊ひ乞食と賤しみ、隔て見れ八月とすつほん、
沓と冠の違ハあれとも、キヤツト産れた其時ハ、
皇女も丸はたが【母の胎内から】胎毒蕪たれてオキヤ
ーく、坊やと呼はうなつひて、まさかにちんとも王
とも言す、乞丐のがきもひり出せは、ヤハリ一物一鉢
にて、天子より【將軍】庶人まで五尺の鉢に男根【ま
ら】一本、

と卑猥な表現ながらも、本質を突く。さらに、目下展開している権力抗争について、

金箔の附たへ、召して、檜舞台の上段にチヨンく、

幕の翳簾の中、天王様【天皇様】とはやし立、御賽銭の多少ニテ御神酒をいた、く氏子方、天王様も御前に遣ひ、江戸草分の名主株を横取せしとの目論見の、はてハ喧嘩の大騒動、楽屋を見れば、天王様ハ囃子か御好て、うつかりとかつかれ、乗氣に成て、我儘一はゐもてあましたるた、つ子、眼かさめかけると痘瘡神かねんくころりて切幕なりけり、冠装束鉄漿染て、三十一文字の御人から、楽屋を見ればめくり札、一六勝負も引きかゝる、ごろつきの長公や、ばくれんのお薩にたまされ、欲か公家んの雲の上、困る八天の下人

也、
*「くげん」は苦患(治しがたい病氣)と公家を掛けたもの、「側面觀幕末史」「落書類聚」はともに「公家人」となっているが、これは、意図的に変えたものではなく、写本系統の違いによる誤字と思われる。

ここで、「天王様は囃子が御好き」とは、江戸の物乞い「わいわいてんのう」の口上。多くは「わいわい天王、囃すが御好き」と謡う。もちろん、この天王は朝廷の天皇とはまったく関係のない牛頭天王。紋付きの羽織袴に猿田彦の面・両刀差しという出で立ちで、牛頭天王のお札配りを口実に、門付けを乞うものである。また、「一六勝負」は、文字通りはサイコロ博打のことだが、こゝは、この年一月に踐祚した一六歳の天皇睦仁(明治天皇)を、長州(こゝ

つきの長公)や薩摩(ばくれんのお薩)などが何とか見方に引き入れようと画策している様子を言っている。

こうした語りの後、

楽屋【本舞台】をいへハ、天子【公家】も乞丐も、自ら耕し喰ふにあらす、精々辛苦民の汗を貰て喰ふのは御仲間にて、貰かあれハ腹を肥し、なけれハ朕か不徳【(以下四字欠)】とあきらめ、青天井を家根となし、天下の軒端を傘とし、地球を以暈とし、大洋を泉水と見、：

と語り、さらに結びでは、

人間万事裏表、其為口上、右之様に【左様々々と】、曲らぬ筆を取る【廻らぬ筆に述る】ものハ、とこそそのたるまの椽の下で力持をする。慷慨隠士。

と、筆を曲げずに真実を語る己、慷慨隠士は禅寺の主であることを匂わせ、チョボクレを終えている。

これは慶応三年の九月頃まで流行していたものと思われる。前年末に孝明天皇が疱瘡によつて突然死去したことにより、この年正月に踐祚した睦仁親王一六歳を、「天王様ハ囃子か御好て、うっかりとかつかれ、乗氣に成りて、我儘一はゐもてあましたるた、つ子」冠装束鉄漿染で、三十一文字の御人がら」と、江戸の物乞い「わいわいてんのう」の口上に模して厳しく評言する。さらに、薩長が天皇を前面に立てて討幕運動に動いている事態の本質を、

「天王様も御前に遣ひ、江戸草分の名主株を横取せしとの目論見」と、みごとに見据えたこの「慷慨隠士」は、眼前に展開している政治抗争・政治対決を冷静に見つめつつ、いよいよ喧伝される尊王思想によつて至尊とされた天皇も、ざやつと産れた其の時は、蔑まれていた乞食と同じ人間であると喝破したのである。

何故同じか、それは「自ら耕し喰ふにあらす、精々辛苦民の汗を貰て喰ふ」点において「御仲間」であり、共に、「貰かあれば腹を肥し、なけれは朕か不徳とあきらめ」るべき存在であったからである。

後期水戸学や平田派神道以来、一部尊王家によつて神にまで持ち上げられつつあった天皇を、敢えて乞食の仲間引き下ろすことで、人間の本質的平等を断言したのである。それは、薩長にも、幕府にも、もちろん朝廷にも付かない、「天の下人」の視点に自らを置いた、禅宗坊主の炯眼であったと言えよう。

おわりに

本来であれば、紹介したような諷刺文芸に見られる民衆レベルでの天皇観に関し、文久年間以降やかましく喧伝され、思想潮流としても無視し得なくなる尊王思想との対応関係などについて、論を展開すべきであろうし、また、こ

うした諷刺文芸の創り手と受容層、したがってまたこうした天皇観の担い手・広がりなどについても、私見を披露すべきであろう。が、紙幅の制限のため、小稿ではこれ以上の展開は出来ない。小稿は、筆者が現在執筆途中の拙著『諷刺眼維新変革―民衆は天皇をどう見ていたか―』の、ごく一部分を加筆修正したものである。本年中に刊行予定の拙著では、小稿で紹介したもの以外にも、未公開の諷刺文芸を多数紹介し、分析を加えてある。その全体的な作業との関連で、上記の課題は達成できるものでないので、関心を持たれた方は、後日そちらを参照していただきたい。

なお本稿は、アジア民衆史研究会二〇〇一年度大会（二〇〇一年八月四日、於専修大学生田校舎）で筆者がおこなった講演と一部重複していることをお断りする。

なおまた、前稿に引き続き、本稿も史料閲覧にあたっては、東京大学史料編纂所および国立国会図書館古典籍資料室に大変お世話になった。記して感謝の意を表します。

註

① 拙稿「『見立ていろいろはたとへ』の成立―民衆の天皇観解明のための基礎作業として―」跡見学園女子大学文化学会編『フオーラム』第十九号（二〇〇一年三月）、参照。

② 京都大学図書館所蔵（以下、京図と略記）『乞食袋』巻四、ただし、東京大学史料編纂所画像史料解析センター（以下、

東史センターと略記）撮影の複写史料による。以後の京図史料、原写本も同様。

③ 第一・二・三・五・六台場の五基（第四台場は途中まで）を、

総工費約七五万両をかけて築造したというこの御台場築島については、『品川区史―通史編上（一九七三、東京都品川区一二五―一五六頁（浅井潤子氏執筆部分）および、『維新史料綱要』巻一、四五九頁以降の記事を参照。

④ 拙著『幕末民衆文化異聞―真宗門徒の四季―』（吉川弘文館、一九九九）、参照。

⑤ 『孝明天皇紀』第二、一一二頁。

⑥ 同前、一一三頁。

⑦ 同前、一一三―四頁。

⑧ 以上、同前、一六〇―一六四頁。

⑨ 『弘道館記述義』『日本思想大系』巻53『水戸学』（一九七三、岩波書店）。

⑩ 東京大学史料編纂所所蔵（以下、東史と略記）『聞集録』巻四七。

⑪ 『聞集録』巻四七には、この狂歌と並んで嘉永六年冬の狂歌も入っている。が、この部分は、来航以来同年中の狂歌を集めた箇所であり、夏頃のものと同年末頃のものとは混ざっている。

⑫ 『三言四句』京図『乞食袋』巻一五。

⑬ 櫻木章『側面観幕末史』（一九〇五、啓成社発行・一九八二、

- 続日本史協協会叢書復刻、東京大学出版会）二、七四四頁。
ただし、「国無財」が「国無賊」となるなど、あきらかに誤
写と思われる写本系列のものから引いている。なお、「側面
觀幕末史」については、註①拙稿の註①参照。
前註⑬に同じ。
- ⑭ 『孝明天皇紀』第三、四六一・四七四頁。
⑮ 『統徳川実記』第三編、八二〇頁。
⑯ 『孝明天皇紀』第三、五五〇〜五五一頁。
⑰ 東史『辛酉紀聞』卷一。
⑱ 内田九州男・島野三千穂編『幕末維新京都町人日記』（清文
堂、一九八九）、一四六・一四九頁。
⑲ 詳しくは執筆中の拙著を参照していただきたい。
⑳ 「当世子供雑談」国立国会図書館古典籍資料室所蔵（以下、国
会と略記）『慶応元乙丑記』卷四。
㉑ 『側面觀幕末史』二、七三八〜七四四頁。『落書類聚』下卷一
三九〜一四一（国会）『落書類聚』卷三五。なお、『落書類聚』
についても、註①拙稿の註①参照。
㉒ 東史『新聞書』卷四。

（なぐら てつぞう・日本近世思想史）